

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04093

研究課題名(和文) 東日本大震災における社会関係資本を活用した復興政策についての研究

研究課題名(英文) Research on Reconstruction Policy Using Social Capital in the Great East Japan Earthquake

研究代表者

遠藤 薫 (Endo, Kaoru)

学習院大学・法学部・教授

研究者番号：70252054

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災の復興政策では、社会的ネットワークの存在が重要視されている。復興のスピードは、社会的ネットワークがあるか否かによって、大きな違いが生じている。分析の結果、被災地の現在あるいは大震災直前の被災地の状況だけでなく、長期にわたる地域の動向を考えることが、本質的な意味での地域社会のエンハンスメントにつながるのではないかと考えるに至った。被災地域の回復は、1回の「大震災」からの復興を問題にするのではなく、日本の近代化全体を問い直す必要があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究から、東日本大震災を、単に物理的な地域破壊と考えるのではなく、社会的ネットワークへの打撃と捉えることの意味を検討したが、その結果、明らかになったのは、震災後の社会ネットワーク再興には、震災直前の社会ネットワーク、さらにそこに至るまでの長期的歴史的ダイナミズムおよび自然環境変化との相互作用を含めて考える必要があることである。この視点により、今後の被災地復興において、地域産業および地域アイデンティティの新たな可能性を見いだすことができた。

研究成果の概要(英文)：The reconstruction policy of the Great East Japan Earthquake emphasizes the existence of social networks. The speed of recovery depends greatly on the existence of social networks. The results of the analysis show that not only the current situation in the affected areas, or the situation in the area immediately before the earthquake, but also the long-term regional Thinking about the dynamics may lead to community enhancement in the essential sense of the word. I've come to the conclusion that the recovery of the affected areas is not a matter of a single "disaster" but of the entire modernization of Japan. The recovery of the affected areas is not just a matter of recovering from a single "great earthquake", but also of the modernization of Japan as a whole. It is clear that the question needs to be asked.

研究分野：社会学 社会システム論 社会情報学

キーワード：東日本大震災 社会関係資本 復興政策

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 東日本大震災の復興政策では、社会的ネットワークの存在が重要視されている。とりわけ事業者の再建プロセスでは、事業者同士のネットワークがあるかどうか、助成される際の大きな判断基準となっている。

(2) その結果、復興のスピードは、社会的ネットワークがあるか否かによって、大きな違いが生じている。

### 2. 研究の目的

(1) 上記の問題関心に即して、本研究は、震災以前・震災直後・復興期において、事業者がいかにネットワークを形成し、そのネットワークがどのように復興に影響を及ぼしているかについて分析を行う。

(2) また、事業者のネットワークが、行政や市民セクターといかに連結しているか(ローカル・ガバナンスの構築につながっているか)について分析をおこなう。

### 3. 研究の方法

(1) プロジェクト1年目で力を注いだのは、資料収集である。本研究に必要な参考文献のリストを作成しつつ、被災地で発行されている新聞・雑誌記事や各種ニュースレター、また当該地域の歴史に関する文献資料の収集に努めた。また、岩手県大槌町、および宮城県石巻市において、数度フィールド調査をおこなった。具体的には、石巻市において、複数の被災事業者に対して、大槌町では、被災事業者に加えて、まちづくり会社(復興まちづくり大槌)・行政職員に対してヒアリングをおこなった。

(2) 2年目は、三陸沿岸における社会的ネットワークの歴史の変遷を探った。背景としては、三陸沿岸部の、漁業を媒介とした広域的な社会ネットワークと、養蚕を媒介とした域内ネットワークの重なり合いに着目し、地域産業の変化とそれともなう社会的ネットワークの変化が、地域のレジリエンシーにどのような影響を与えているかを歴史的に検討した。

(3) 3年目は、内陸部被災地—長野県栄村(3月12日に大地震が発生)から福島県中通り、浜通を経て、三陸海岸にいたる一帯は、古くから養蚕業が盛んであり、繊維産業が日本近代化の推進力であった頃、大いに栄え、豪商が大きな屋敷を構えたところも多い。この地域について、フィールドワーク、ヒアリング調査などを行った。

(4) また上記以外に、インターネットモニター調査による全国社会意識調査を行った。

### 4. 研究成果

(1) 本研究から、被災地域の回復は、1回の「大震災」からの復興を問題にするのではなく、日本の近代化全体を問い直す必要があることが明らかになった。すなわち、東日本大震災が直撃した三陸沿岸地域は、過疎化、高齢化が危惧される地域でもあった。大きな被害を受けた地域のほとんどがそれ以前から過疎化、高齢化の傾向にあった。しかもその動向について、既に日本近代化の初期段階から柳田國男は指摘している。柳田は、ひとは「おりたくないゆえに出て行く」と述べ、いったん出て行ってしまった土地に戻ることの難しさを指摘して、「これを知らずに帰農を説く人は気の毒というよりむしろ憎い」と批判している。柳田國男がみていたのは、昭和初期の日本であり、当然のことながら現在とは様々な面で異なっている。にもかかわらず、たとえば、「日本で毎年の自殺者は一万数千、このごろ東京だけでも一日に五人ずつ死んで行く」(柳田:1930)という状況を、「孤立貧」によるものであり、「社会病」であると指摘するなど、今日にも通じる社会批判が多くみられる。

(2) 上記をふまえて、東日本大震災を、単に物理的な地域破壊と考えるのではなく、社会的ネットワークへの打撃と捉えることの意味を検討したが、その結果、明らかになったのは、震災後の社会ネットワーク再興には、震災直前の社会ネットワーク、さらにそこに至るまでの長期的歴史的ダイナミズムおよび自然環境変化との相互作用を含めて考える必要があることである。たとえば限界集落化が危惧されている石巻沖の離島が、かつては東日本から西日本まで及び広大な養蚕ネットワークの一部をなしており、また、日本全国とつながる海のネットワークの重要な結節点であり、莫大な富を築いて俗謡にも唄われる網元や、現代日本にもその影響力をもつ廻船主の一族が足跡を残した地であることが見えてきた。田代島と本土とを隔て、津波などの自然災害をもたらす海は、同時に、島と本土各地を縦横に結び、豊穡な恵みをもたらす、まさに、「分離しつつ結合する境界」であった。いいかえれば、現在は閉ざされた周縁として衰退が必然であるかのように論じられる地域も、かつて開かれへの起点として位置づけられていた。現代においても、トポロジカルな反転により、境界を越境の架け橋とすることは可能なはずである。そしてこの反転を具体的に復興策として構想するために、融通無碍に「越境する知」を実践していく必要がある。

(3) 東日本大震災で被災した阿武隈川流域は、古くから養蚕で栄えた。阿武隈川流域で養蚕が盛んであった理由の一つとしては、阿武隈川の氾濫が桑の生育に有利であったことが挙げられるかもしれない。大迫(1965:361)は、「堤外の氾濫原では、桑は他の普通畑作物よりも洪水被害が少ないという消極的理由のほかに、沈泥によって土壌が肥沃となるために桑の生育がよく、

きょうそ病が少ないといった積極的な条件もあって、桑が根強く栽培されている」と論じている。2019年10月の台風被害（阿武隈川氾濫被害）は、まさにこの地が養蚕に適していることと表裏の関係といえる。この視点により、今後の被災地復興において、地域産業および地域アイデンティティの新たな可能性を見いだすことができた。

（4）さらに今後に向けては、ソーシャルメディアの活用が重要であることがわかった。大震災前および大震災後まもなくの頃に比べると、大槌町のソーシャルメディア利用の洗練度（見やすさ、デザイン性、表現など）は格段に向上したといえる。その背景には、外部からのさまざまな支援者のアドバイスがあった。大槌町は、受けた被害が壊滅的だったため、役所などの職員はほとんど外部からの応援であった。また、大槌には東大大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターがあることから、東大が中心となった、大槌町の総合的な復興のための様々な支援活動が行われている。こうしたことから、ソーシャルメディア利用などもデザインのすぐれたものとなっている。反面、パッケージングされた内容で、土地独自の肌触り、想いのようなものが希薄になった感もある。内容的には、広報的なコンテンツが多く、双方向的コミュニケーション、更新頻度、アクセス度などは多いとはいえない。また、FB、TWなどの新しいタイプのソーシャルメディアは活用が遅れている。復興をさらに進めるには、ソーシャルメディア活用による結束型、橋渡し型社会関係資本の形成が必要であり、そのための工夫がさらに求められる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 遠藤薫	4. 巻 第5巻2号
2. 論文標題 「生と死のサービソロジー - - 「生きた証」をアーカイヴする - - 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『サービソロジー』	6. 最初と最後の頁 24-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.24464/serviceology.5.2_24">https://doi.org/10.24464/serviceology.5.2_24</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 遠藤薫	4. 巻 23 巻 9 号
2. 論文標題 「高度経済成長期から現在へ 日本型社会システム をどのように評価するか 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『学術の動向』	6. 最初と最後の頁 9-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.5363/tits.23.9_7">https://doi.org/10.5363/tits.23.9_7</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 遠藤薫	4. 巻 第54巻1号
2. 論文標題 「幕末から維新时期における社会変動と大衆の無意識 招き猫と化け猫騒動 - - 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『法学会雑誌』	6. 最初と最後の頁 33-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 遠藤薫	4. 巻 23
2. 論文標題 越境する・社会・学 地域と時代を越えて「社会的なるもの」を問う	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 7-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.5363/tits.23.4_7">https://doi.org/10.5363/tits.23.4_7</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 遠藤薫	4. 巻 23
2. 論文標題 猫の島から東日本大震災を考える - 越境する・社会、をとらえる、越境する・知	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 8 - 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.5363/tits.23.4_8">https://doi.org/10.5363/tits.23.4_8</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤薫	4. 巻 11
2. 論文標題 大震災後社会における社会関係資本を考える ~人口流出と孤立貧~	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 横幹	6. 最初と最後の頁 90-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.11487/trafst.11.2_90">https://doi.org/10.11487/trafst.11.2_90</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤薫	4. 巻 53
2. 論文標題 近世の都市 農村の文化的交差 近代 を準備した江戸の猫ブーム	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学習院大学法学会雑誌	6. 最初と最後の頁 41-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤薫	4. 巻 22
2. 論文標題 「「はたらく」ということ 「強い男(女)という妖怪」に抗して」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 101 - 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.5363/tits.22.8_101">https://doi.org/10.5363/tits.22.8_101</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新雅史	4. 巻 -
2. 論文標題 生活を支援することの困難さ 大槌町での5年間	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 吉原直樹・似田貝香門・松本行真 (編集) 『東日本大震災と 復興 の生活記録』 六花出版	6. 最初と最後の頁 274-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 遠藤薫
2. 発表標題 メディアは原発事故をどう伝えたのか - エネルギー・リスクへの社会的対応
3. 学会等名 エネルギー懇話会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤薫
2. 発表標題 今振り返る、東日本大震災とメディア ドキュメンタリー番組における 被災者 と 報道者
3. 学会等名 メディアとことば研究会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考